

Weth v. d. Ergebnisse d. gesammter Tbk-Forschung. Bd. I (1930)

藤井, 日本内科学会雑誌 22 卷 6 号

加納, 結核 20 卷 6 号

勝忍, 結核 12 卷 7 号

栗谷川, 東北医学会雑誌. 15 卷 5 册

田辺, 十全会雑誌 43—45 卷

東田, 結核 結核 8 卷 9 号

横井, 結核 2 卷 2 号

## 尿 路 結 核 と 副 辜 丸 結 核

(結核療養所に於ける臨牀的觀察)

國立療養所村松晴嵐莊(莊長 木村猛明博士)

橋 本 正 良

### (1) 緒 言

昭和 10 年 10 月村松晴嵐莊開所以來同 19 年末迄の全入莊患者の病牀日誌の中から、記録された尿路結核症を拾集して 100 例を得た。その 100 症例の中で副辜丸結核の発症を併せ記録されているものに就て調査した。

### (2) 頻 度

この調査で、尿路結核症として記録された患者 100 名の中の副辜丸結核を併発したものは 35 名である。Bachrach(20%) Beck (19.3%) Bruns (15%) 等に比しては多く、Bumpus (36%) Küttner (40%) 坂口~大森 (34%) に近く、Isquierdo (60%) Suter (70%) Rafin (53%) Wildbolz (71%) に比しては遙かに少い。

### (3) 結 核 症 経 過

尿路結核症を記録された 100 名の中で副辜丸結核を発症した 35 名についてみるに、結核症発症以來尿路結核発症までの既往症として、胸膜炎 23 (内 20 は結核症経過の初発症) 肺結核 23 (内 7 は結核症経過の初発症、9 は胸膜炎に続発) 腸結核 8、腺結核 8 (内 1 は結核症経過の初発症) 骨結核 5、膿胸 3、腹膜炎 2、関節結核 2、心嚢炎 2 (内 1 は結核症経過の初発症) があり、又、尿路結核について起つたものに、胸膜炎 4 (初発症としての胸膜炎の対側) 骨結核 3、結核性脳膜炎 3、肺結核 2、腸結核 2、頸腺結核 2、関節結核 1 が

ある。

原田~石川は、副辜丸結核の合併症として肺結核が最も多し、石川~李は、胸膜炎多く 56% に達すと報告し、坂口~大森は、胸膜炎既往を 95.4% にみとめ、市川~木村は、副辜丸結核の既往症、合併症に就て記述し、既往症の結核性疾患として胸膜炎 21%、肺結核 3.7%、骨結核 1.5% 関節結核 0.5%、腺結核 0.2%、結核性合併症として肺結核 1、胸膜炎 2、骨結核 1、痔瘻 3、関節結核 2、海綿体~陰莖各 1、皮膚結核、結核性静脈炎各 1、計全症例の 3% をあげている。

私の調査でも、先学の成績と同様に、胸膜炎及び肺結核が既往症の首位を占め、且つ、その割合ははるかに高く 2.3 に近い。私の調査が結核療養所に於てなされたによるのであろう。

骨結核、腺結核の既往症に占める割合も先学の報告に比してはるかに高い。

### (4) 患 側

副辜丸結核症 35 名の中、一側に止つたもの 26 名 (右 13 名、左 13 名、結核症経過の初発症として発症したもの右 2 名、左 2 名、尿路結核の決診前に発症したもの右 9 名、左 8 名)

両側発症したもの 9 名 (右に初発したもの 2 名、左に初発したもの 4 名、両側同時に発症したもの 3 名。両側共尿路結核に先行したもの 3 名、一側は尿路結核に先行し、対側は尿路結核に後発したもの 1 名、両側共に尿路結核に後発したもの 5 名。)

市川～木村は、単側 252、両側 195、石川～李は、単側 169 両側 51、大桑は、単側 64%、両側 36% と報告し、石川～李は左側に稍好発すといひ、大桑は右 37.9%、左 26.1%、といつてゐる。

私の調査では、単側と両側との比は石川～李の成績に近く、市川～木村や大桑の成績よりも単側に止るものが多い。好発側については、私の成績は特別な所見を認めない。又、市川～木村の報告では両側同時の発症は、7/452 にすぎぬが、私の調査では 3/35 を示している。

### (5) 對側発症までの間隔

一側発症から他側発症までの間隔を、副睾丸摘出術、去勢術等治療を施したものと、一般症状其他の理由から全然治療を加えなかつたものとに分つて観察すると、市川～木村の加療群の對側発症 1 年以内 38.7%、非加療群の對側発症 1 年以内 71.4%、間隔の平均日数加療群 25.3 月、非加療群 10.6 月なりとの成績に比して、私の調査では、加療群で 1 年以内 5/6、非加療群で 1 年以内 4/5 で間隔は甚短かい。加療群が非加療群に比して間隔の長いのは同様である(加療群 3～12 月 4 名、非加療群 1～2 月 4 名)

坂口～大森、石川～李は、非加療群に於ける對側腫脹までの日数について報告しているが、共に 6 ヶ月以内に略半数、1 年以内に 2/3 に近い症例の発症をみている。

### (6) 豫 後

村松晴嵐莊で昭和 10 年 10 月から昭和 19 年末までに副睾丸結核に手術したものは 53 名(63 例、即、両側処置例 10 をぞかえる)あり、その中で尿路結核を続発したもの 18 名、尿路結核に続発したもの 11 名で、前後はあれ尿路結核を発症したものは計 29 名である。尿路結核を発症しない 24 名は、副睾丸結核の加療後 2～82 ヶ月を経過し、生存者は 14 名である。

村松晴嵐莊に於ける昭和 13 年 12 月以降昭和 19 年末に至る 300 体の剖検例に於て、副睾丸結核があつて尿路に結核病変をみとめなかつたもの 1 例がある。

### (7) 初発結核症との間隔

副睾丸結核発症の初発症からの月数をみると、結核症経過の如何にかかわらず、1～5 年以内特に 3 年以内のものが最も多い。

坂口～大森は既往の胸膜炎から副睾丸結核の発症までの月数を調査して 123 例の中 5 年以内に 52 例、10 年以内に 96 例(75.6%) と報告してゐて、私の成績と甚だしく相異なる。

石川～李は副睾丸結核の統計的観察の中に既往症に胸膜炎が多く、胸膜炎発症後概ね 1 年にして副睾丸結核を起すと報告している。

私の成績でも、胸膜炎及び肺結核を既往歴にもつものが多いが、副睾丸結核発症に至る間隔は 1 年以内よりはむしろ 1 年以上 3 年以内のところに密度が濃いようである。又、初発症の如何にかかわらず初発症から副睾丸結核発症までの間隔も 1～3 年に於て多い。

### (8) 尿路結核症との間隔

私が、副睾丸結核発症と尿路結核発症との間隔について調査したところ、副睾丸結核と尿路結核との前後についてみると、2:3 の比で尿路結核に後発するものの多いのがみられ、尿路結核に先んじたものは 6～48 ヶ月に多く、尿路結核に後発するものは 1～12 月に多い。

市川～木村は、副睾丸摘出より膀胱症状の発現までを 19 例について、坂口～大森は腎摘出後副睾丸結核発症までを 38 例について報告しているが、共に、尿路結核に先んじたものは 6～48 ヶ月に多く、尿路結核に後発するものは 1～12 ヶ月に多いと述べ、私の成績に一致するが、又共に、7～10 年の間隔で発症したものを示している。

### (9) 結 語

村松晴嵐莊開所の昭和 10 年 10 月から昭和 19 年 12 月に至る間の副睾丸結核について、特に尿路結核症を記録されたものについて調査した。

イ) 尿路結核症を記録された 100 例の患者の中で、副睾丸結核を発症したものは 35 例である。

ロ) 既往歴に於ては、胸膜炎及び肺結核が首位

を占め、且つその割合は先学の成績に比してはるかに高く 23 に近い。

ハ) 単側に止つたもの 23、両側発症したもの 9、好発側を特にみない。両側同時発症 335 あつて、高い割合を示している。

ニ) 一侧から対側への発症の間隔は、一侧加療群で 1 年以内 56、非加療群で 45 である。

ホ) 昭和 10 年 10 月から昭和 19 年 12 月までに村松晴嵐荘で副睾丸結核に手術したものは、53 名、63 例。その中で尿路結核を発したものの 29 名発症しないもの 24 名中生存者は 14 名である。

ヘ) 副睾丸結核発症の初発症からの月数をみると、1~5 年以内特に 3 年以内のものが最も多い。

ト) 副睾丸結核発症と尿路結核発症との間隔は、尿路結核に先んじたものでは 6~48 月に多

く、尿路結核に後発するものでは 1~12 月に多い。

東京大学泌尿器科市川教授、村松晴嵐荘長木村猛明博士の御指導御鞭撻に衷心の謝意を表します。

## 文 献

- Bauchrach. Zeit. f. Uro-chir. Bs. 11. 1914  
 Beck. Dtsch Zsch. f. Chir. 84  
 Bauns. Zsch. f. Chir. 77. 1905  
 Küttreer. Z. B. f. Chir. 23 1923  
 Suter. Schweiz Med. W. S. 1923  
 Rafin. Encyclop. franc. Uro. 2. 1914  
 坂口~大森 日泌尿会誌 24~7 昭10  
 原田~石川 皮泌雑誌 37~6 昭10  
 石川~李 日外会誌 42~8 昭16  
 市川~木村 日泌尿会誌 36~2 昭19  
 大森 十全会誌 42~7 昭11

# 結核菌培養時の封蠟の代りにゴムのキャップを使用した小実験

財団法人結核予防会結核研究所(所長 隈部英雄)

小 川 辰 次・北 林 千 代 志・佐 波 薫

国立予防衛生研究所結核部(部長 柳沢 謙)

浅 見 望・林 久 子

## I 緒 論

我が國は終戦後四年を経過したとはいえ、研究の資材に事欠くことが多い。我々の研究の方面では綿栓に使用する青梅綿、パラフィン等がかなり不足している。たまたま余等の一人、浅見が2000倍稀釈のツペルクリンを 50cc 入れて市販に出す瓶を封するために用いるキャップを、結核菌培養時に封蠟の代りに用いることを考えたので、これを実際に使用出来るかどうかの、小実験をやつて見た。

## II 方 法

封蠟：小川<sup>1)</sup>が先に資材節約の意味で考案した方法によつた。即ち青梅綿の上を硫酸紙と日本紙(反古紙でよい)で包んだもので、中試験管の綿栓をして、滅菌し、この試験管で培地を作り、培養

し了つたら綿栓を抜いて、溶したパラフィンに浸して封蠟した。

ゴムのキャップを使用する方法：培養し了る迄は前者と同様である。培養し了つたら、綿栓を抜き取つて、その代りに予めよく洗つて、乾し、コッホ釜で 100°C 30 分間滅菌しておいたゴムのキャップをかぶせる。

この両方法を同一の培地を使用し、同様に処理して培養したものについて実施して、培地の乾燥の程度、結核菌の発育の状況を比較した。

## III 成 績

### 1. 純粹培養の結核菌浮游液による實驗

人型菌、陸 F T P 株の、グリセリン馬鈴薯培地、16 日間培養のもので、1cc 中 10mg を含む菌浮游液を作り、これを原液として滅菌蒸留水でうすめて、1cc 中 10<sup>-7</sup>mg とし、1cc のメス